

世界中で潰瘍性大腸炎に関する実態調査を実施

5月19日のWorld IBD dayに合わせて、ファイザーは中等症から重症の潰瘍性大腸炎の患者さんの実態調査の結果を発表しました。調査は2017年から2018年に実施され、日本を含む世界10カ国の潰瘍性大腸炎患者さん2,100名、消化器科の医師1,254名が参加しました。調査によると、潰瘍性大腸炎の患者さんは、日常生活に大きな支障をきたし、家族や周囲の人への影響も大きいことがわかり、その傾向は世界中で同様であることが明らかになりました。



世界中の潰瘍性大腸炎の患者さんをエンパワメントする新たな知見

世界的に潰瘍性大腸炎の発症率が上昇しており、潰瘍性大腸炎患者さんに対する支援の必要性が高まっています。医師と患者のコミュニケーションを良好にすることで、周囲の理解が得られ、潰瘍性大腸炎の患者さんの疾病管理もよりよいものにできるかもしれません。

トイレを気にする生活

IBD患者さんは調子がいいときでも1日4回、悪いときには1日10回もトイレに駆け込まなければならないほど、常にトイレを気にする生活をしなければならないのです。



寛解は難しい？

「自分は寛解している」と答えた患者さんでもトイレに駆け込む回数が多いことに変わりはなく、調子の悪い日は「自分は寛解していない」と答えた患者さんと同様回数でした。



Best day = 3
Worst day = 9



Best day = 4
Worst day = 12

精神的に疲弊してしまう

IBD患者さんの84%が「潰瘍性大腸炎は心身ともに疲弊してしまう疾患」と答えています。

84%



※ UC Narrative の結果より抜粋

IBDとは

炎症性腸疾患(Inflammatory Bowel Disease)を表すIBDは、主に潰瘍性大腸炎(Ulcerative Colitis; UC)とクローン病(Crohn's Disease; CD)を指します。UCは原因不明のびまん性非特異性炎症で、炎症は主に腸管の粘膜と粘膜下層に現れ、びらんや潰瘍を形成します。CDは原因不明の内芽腫性炎症性疾患で、若年で発症することが多く小腸や大腸に浮腫や潰瘍が現れます。この2つの重篤な慢性消化器疾患の原因は明らかになっておらず、疾患に対する認知度が低いのが現状です。